2025年5月4日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

人生最大の気付き

［ガラテヤの信徒への手紙1章1～12節］

人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、ならびに、わたしと一緒にいる兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教会へ。わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように。キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。わたしたちの神であり父である方に世々限りなく栄光がありますように、アーメン。キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。しかし、たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。わたしたちが前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい。こんなことを言って、今わたしは人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、何とかして人の気に入ろうとあくせくしているのでしょうか。もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません。兄弟たち、あなたがたにはっきり言います。わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。

[1] パウロ「怒り」の背後にあるもの

　「マタイによる福音書」を読むことが終わって、今月と来月は、パウロの手紙からご一緒に見て参ります。今月は「ガラテヤの信徒への手紙、」6月は「フィリピの信徒への手紙」を読みます。

　私たち、自分が大事にしているものや人が軽んじられたり、或いは傷つけられたり汚されたりすると、とても残念に思ったり、怒りさえも出て来ることがあると思う。パウロのこの「ガラテヤの信徒への手紙」は、怒りから始まっていると言って良いと思います。

　それは、このガラテヤの教会の中で、パウロが心から信じている「福音」を歪めて伝えている者たちが入り込み、またそれが人々の歓心を呼んでいたからです。パウロはこう書いています。「キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。しかし、たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。わたしたちが前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい。 」

 「呪われるが良い」とは、きつい表現です。こんな手紙は嫌ですね。しかし、送る方は本当に心を痛めていたと思います。なぜなら、「福音」というのは、文字通り「良い知らせ」である筈なのに、「良き知らせ」にならない教えが人々の心を惑わしていたからです。なお、ガラテヤとは、小アジアの中央北部を指す地域で、現代のトルコの中央地域に相当します。﻿当時、ローマ帝国の支配下にありました。パウロはその外国の地域に伝道した訳ですが、そこに「ユダヤ主義」を強調する者たちがいたということです。「パウロが語った信仰は本物じゃない。正当な信仰とは、割礼を受け、律法をことごとく遵守することが大事だ」と。それに対して、パウロは「それは違う！と言っている訳で、詳しくは来週以降見て行きたいと思います。また、ガラテヤの人々にそういうことを語る人々がいた背景には、パウロ個人の「使徒」としての正当性が疑われていたということがあったようです。考えてみると、パウロと言う人は「福音書」には登場しません。いわゆる十二弟子ではない訳です。それなのにとても大きな働きをしている。「何様か」みたいな不信もあったのだと思います。当時は、誰かを教師として受け入れるという時には、「推薦状」というのがあったようです。パウロさん、血統書ではありませんが、きちんとした推薦人がありましたかと。イエス。キリストに直接会った弟子たちとは違う。信用できるのかと。…そこでパウロはこの手紙で、自分のことをこのように自己紹介しているのです。1章1節です。

「人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ」。　これはすごい言葉です。私をキリストの使徒たらしめているのは、人間じゃなくて、神様なんだと言っている訳です。威張っているのでしょうか？いいえ、本当にそうとしか言えないからですね。文語訳ではこうなります。「人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及びこれを死人の中より甦らせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ」！。

リズムも良いですね。そしてこういうのを聞くと、パウロはすごいなあ、その確信はすごいなあと思ってします。でもどうでしょうか。「使徒」と言う言葉を「キリスト者」と言い換えれば、私たちも全く同じなんです。「人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及びこれを死人の中より甦らせ給いし父なる神に由りてキリストを信ぜし者とされた丸山」とか、皆さん一人ひとりの名前です。神様あっての私、神様あっての救い。これは、私たちの存在そのものを支えることとしてとても大切な「気付き」なのではないでしょうか？

[2] 「天地創造の前に」と「世の終わりまで」

実は、パウロは、さらに驚くべき言葉を他の手紙で残しているのです。このガラテヤ書のあとにある「エフェソの信徒への手紙」の1章です。―「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、ご自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。」（エフェソ1:4～5）。これも文語訳で見てみるとこうあります。「御前にて潔く瑕なからしめん為に、世の創めの前（さき）より我等をキリストの中に選び、御意（みこころ）のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給へり」。

みなさん、ビックリしませんか？例えば、今日「招きの聖句」で読んで頂いたイザヤ書49章1節ではこのように神様は語っています。―「主は母の胎にあるわたしを呼び、母の腹にあるわたしの名を呼ばれた」。つまり、私たちが意識する前、母親のお腹の中に命が形づくられた時から主は私と関わっている、ということです。信仰を持つとか神様を信じる・信じないと言う前から、です。それでも驚きですけれど、エフェソ書の方ではそれ以上です！「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して」って言っているのです！「天地創造の前」って想像がつきません…。でも、凄くないですか!? 「世の創めの前（さき）より我等をキリストの中に選び」…！

先週は主が復活された後、弟子たちに現れて、主がこのように約束された言葉を見ましたね。―「わたし、世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28：20）。片や「天地創造の前から」。片や「世の終わりまで」。　私たちどこかで「自分の命は儚（はかな）い」って思っていないでしょうか？私自身は、若い頃ずっとそのように思っていました。でも、そうじゃなかった！そのことに気付いた時から、私は本当に躍り上がるような気持ちになったことを覚えています。私たちのこの「命」は、宙ぶらりんじゃないということです。神様が、この世の始まりの前からそのご愛の中に、私を存在せしめると、ご計画なさったと言うのですから。そしてそれは「世の終わりまで」。私たちの命は、神様の「永遠」と言う時間軸の中に始まり、覚えられ、導かれ、それは尽きないのです。今日の週報の「コラム」で紹介させて頂いた岩本遠億牧師の言葉「今が永遠となる時」も、是非味わって頂きたいと思います。本当に「アーメン」だと思います。（後でお読み下さい）。

[3] 私たちの心には「み言葉」が刻まれている

「最後の晩餐」や「モナリザ」などの絵などで有名なレオナルド・ダ・ヴィンチは画家であり、科学者でもありましたが、実は子供たちのために短い童話も沢山書いているのですね。その中に「紙とインク」という童話があります。こういうお話です。

‟一枚の紙がインクに文句を言いました。「ひどいなぁ、僕をこんなに汚してしまうなんて」。するとインクが答えました「違うんだよ、汚したんじゃないよ。僕は君の上に「言葉」を書いたんだ。これでもう君はただの紙ではない、大切な紙になったんだよ」。それからしばらくたって、人間が机の上を片付けにやってきました。ただの紙やごみは集められ燃やされてしまいました。しかし「こんなに汚れて」とインクがつぶやいた紙を人間は火にくべたでしょうか。いいえ。取っておきました。そこには人間にとって大切なことが書いてあったからです”。シンプルだけど、含蓄がありますね。

神様・イエス様は、私たちの心に「み言葉」を印字して下さったのです。それは「十字架の言葉」です。また「復活の希望の言葉」です。「あなたの罪は赦された」という言葉、「あなたを捨ててみなし児になしない」という永遠の慰めの約束の言葉です。私たちは、永遠に神の子です。神の子らしく、神様と共に歩みたい。礼拝を自分の生活の中心におけるということは何と幸いなことでしょうか。これからご一緒に、イエス様が、「私の愛の内にいなさい」とおっしゃって、この世が終わるまで続くことになる「主の晩餐」にも与ります。ここに「福音」があります。感謝してお受けしましょう。お祈り致します。

主なる神様、今日ご一緒にあなたを礼拝することが出来て感謝致します。思い返すと私たちがこのようにあなたを礼拝するようになるとは夢にも思っていませんでした。しかし、あなたは永遠の初めから私たちを愛し、形づくり、命を与え、あなたを仰ぎながら、皆と一緒に生きる世界へと送り出して下さいました。そのために「教会」も作って下さいました。どうか、私たち、あなたの聖霊に導かれる者として、これからもあなたを賛美する心、感謝する心、悔い改める心をお与え下さい。御心が天に成るように、この地にも成させて下さい。私たちをあなたの道具として下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。